

おっきなかさ・ちっちゃななべ

そらに向かつて、はあくって、ひと息。

一瞬、目の前が真っ白になる。タコカフェのバンも白い向こうに見えて、まるでこの間のスキー場みたい。

真っ白なくうきがゆっくり消えてゆくのを眺めてみると、なんだかにこにこしてきちゃうな。

「ちよつとほのか、なーにすんの？ いきなり」

目を降ろすと、テーブルの向こう側でいつもの顔がめがね拭いてた。 いっけない。

「ごめん、ユリコ。曇らせちゃった？」

メガネかけなおしたユリコが、ちろつ、と目だけでわたしを見た。テーブルの上のタコ焼きふたつ、ひょいひょい、って口に放り込んで、むすつ、って顔して食べてるわ。

「どーせ、こないだ行ったっていうスキーのことで

も思い出してたんでしょ？

あーあ、ほのかばあーつか。こっちは声もかけてもらえないって言うのにさ」

ひどいこと言われてるんだけど ほおづえつ

きながら、もそもそ食べてる顔を見ると、どうしても怒れないわ。これってユリコの得なところかまね。

「そう言わないですよ。誘われたのはラクロス部つながりなのよ？ わたしなんか、なぎさのおまけで連れてってもらえたようなものなんだから」

言った瞬間、ユリコの前のタコ焼きがひと皿カラになった。口いっぱいタコ焼き、すっごい勢いで食べてると思ったら、急に下向いて、

「木俣先輩の旅館にご招待いっ、って。だれ目当てかなんて、最初っからみえみえじゃない。こおくのニブちゃんが、もう」

ん？ なんだかぶつぶつ言ってるけど、よく聞かえないわ。なんだらう っって顔近づけたら、ユリコががばつ、と起き上がった。

「はいはい、わかった、わかりましたよ。でもねえ、化学部からは実質もう追い出されちゃったし、なんか楽しいことってないかなあ？」

なるほどね。

わたしは、両手でほおづえついているユリコみながら、思わずちよつとつなずいちゃった。

ユリコって、これって決めたら一筋だものね。化学部に行かなくなつて、気持ちに穴あいちちゃったのかも。3年間ずつと、ずつと、続けてたんだものね

「3年、かあ」

ふふふ。なんだか、笑いがこみあげてきちゃった。

「なによ、ほのか。いきなり」

ああ、なんかチロツ、って見上げてるわ。いきなり笑っちゃって、気分悪くしちゃったかしら？

「ううん、いい3年間だったなあ、って」

ひかりさんのこととか、闇のこととか、まだまだ心配はあるのね。でもユリコの顔を見ると、楽しいことしか出てこないわ。

「化学部のみんなとの3年間って、すごく楽しかったわ。もう、それだけで十分なくらい。ユリコだって、そうでしょ？」

言ったとたん、目の前の顔が真っ赤になった。ふふ、知ってるんだから。ユリコ、こうやってストレートに言われるの、弱いよね。

「そ、そーいえばさ、ほのか。ほのか蔵の薬って、どうするの？」

ふふふ。また笑いがこみ上げてきたわ。もう、話題変えるのに必死じゃない。まあ、このくらいにしてあげましょ。3年の仲だものね

さてと。ほのか蔵かあ、ほのか蔵、ねえ 理科準

備室にある、わたしのくすり置き場の名前。すつかり定着しちゃって、このままだと卒業してもそのまま置いてそっだけぞ、

「やっぱり、引き上げなくちゃいけないかしら？」

「そー、そー。危ないのも入ってるんだしさ」

ユリコったら、チロツ、ってこつち見つめながら言っ

てるわ。まあ、言いたいことはわかるんだけどね、
「危ないって、そんな　ほんのちよっと、気持ち
よくなるだけでしょ?」

「そう言われちゃったら、ノるしかないじゃない
それが危ないってえのっ!!」

あははは。テーブル、ばんっ!　て叩いてるユリコ
見ながら、おっきなくち開けて笑っちゃったわ。こ
の呼吸も、3年のたまものよね。

ああ、そのまま腕組んで、ぶす、って顔になっちゃ
った。

メガネの上のほうから、じとっ、て目でわたしを
見てる。そう、ね。うん。

「いつまでも、あるわけにいかない、か」

「そりゃそうよ。卒業しちゃったら、あとは後輩のもの
なんだから。わたしたちが居座っちゃいけないって」

「そうね。そうかもしないわ。3年間ずうっとあつ
た、わたしの場所、なくなっちゃうのはちよっと、だ
けど」

「はあ　そっか。だったら、ひとつだけ置いて
たら?」

『ほのか蔵』のこと考えて、ちよっとほけっ、とし
てた頭に、いきなりユリコの声が響いた。

ぱっ、とユリコの方に目を戻したら、なんだかすっ
ごくやさしい顔になってる。いつけない。わたし、そ
んなに悲しそうに見えたのかしら?

「記念にたった一つだけ。これなら、先生だっとう
ん、って言うわよ」

両手でほおづえつきながら、やさしい声でユリコ
が言ってくれた。

「そうね。ひとつだけ、わたしがここにいた記念の
おくすり、か。でも」

でも、どれを置いていったらいいのかな?

「ねえねえねえ、なぎさは、置いてく?」

となり歩いてる志穂が、いきなりあたしに声かけてきた。

もう部屋に行くことも少なくなるから、つて荷物を持ち帰りに学校行った帰り道。なんか色々出しちゃって、あたしも莉奈たちも、ほとんどだまっただま歩いてただけだね。

「へ？なにを？」

だから、志穂が目の前に回りこんできたとき、あたしは本気でわからなかった。なに言ってるのか。

「クロスよ、クロス。ほら、後輩に残してくの、あるでしょ？」

ああ、そっか。置きクロスのことね。まだ本気でやるかどうかわからない、新入部員が使うやつ。そういうえば毎年、卒業生が何本か置いていくんだっけ。

そっかあ。あたしも、最初はお世話になったよね

「なきびのだったら、みんなにひっぱりだこだよなあ」

「そうそうそう！あたしが一年だったら、欲っしいなあ」

志穂ったら両手にぎって、上目づかいでこっち見てるよ。「冗談バレバレじゃん。まったくさ。」

「二年でも、奪っちゃうかもね」

あゝあ、莉奈まで調子合わせ始めちゃってるし。しょうがないなあ、もう。

「こらこら。二年もやりこんでて、自分の持つてないんじや問題だよ？」

ふたりがあたしの方向いて、ほっぺたふくらませた。

「えー？でもカナなんて、さいごまで置きクロス使ってたよ？」

「あれは特別だつて。カナのお姉さんが置いてったんだもん。普通はちゃんと自分の持つてしょうが」

はあ。あたしだって固いこと言いたくないけどさあ。ふたりとも、ノリすぎだよ。ほんと。

お!?

「でもねでもねでもねー！」

ちよつと目えつむつてため息ついちゃって、目をあけたら志穂のアップ。な、なによ？

「やっぱ欲しいよ、なぎさのー!」

すっごいキラキラした目で見つめられて、思わず一歩さがっちゃったあたしの背中が、やわらかいものにぶつかった。

「志穂やあたしのはさ、置いてっても持っても、どっちでもいいだろうけど。なぎさのは、結構いいと思うよ!」

背中から莉奈の声。それも、振り向かなくても顔が浮かぶくらい、やさしい声

「い、いい、つて?」

背中の莉奈から離れようとしたら、目の前にまだ志穂。それも、べったり。

「きつときつときつと、なぎさのクロスは、ラクロス部のちからになるよ。なぎさのクロスに守られてくんだよ、絶対!」

くつつくくらい目の前、志穂の目がマジだ。なんか遠く、未来を見てみたいいな目。って、妄想入ってんじゃないの、それ?」

「ムリムリ! あたしはそんなガラじゃないって!」

言いながらなんとか逃げようとしたあたしの肩が、後ろからがっしり掴まれた。

そおつと背中見てみたら、莉奈の目も志穂とおなじ。マジな目で、こつちをじいっと見てるよ。

「まー、見ててごらんさないな。残してったなぎさのクロスはねえ、きつと一番奥のいすの上に飾って置かれるよ。」

あと3年もして、知ってる後輩がだーれもいなくなってもね!」

あー、なんだか、あたしの周りに部室が見える気がするなあ。3年間ずっと過ごしてきた、ロッカーだけのせまつ苦しい部屋が

「ほらほらほら! なぎさ、置いてきたくなかった? なった?」

志穂のいつもの声が出た瞬間、あたしの周りがまた道路になった。

すぐそばで、そおつと離れようとしてる気配

逃がすかあつ!!

「痛い痛いいた〜いつつ!!」

ひとをからかつかうなってえ〜のっ! ったく、まあ!!

「とりあえず、ほのかの分は飲み物だけ追加してきたよ」

大きなパラソルの下に戻ったわたしを、空っぽのお皿が迎えてくれた。さつき、勢いで全部たいらげちゃったんだよねえ。注文追加するとき、持ってけばよかったな。失敗したわ。

「ありがと、ユリコ」

お皿の向こうから、ぼーっとしたほのかの声。さつきなんか、クレープ持ったまま考え込んでたっけ。うすいピンクのセーター、もう少して汚しちゃうとこだった。それだけ、考えてるんだらうなあ。

「よし。大きく息すって、と。」

「ところでさ、ほのか。いま残ってる薬って、何が
あるの?」

わたしは息はくのと一緒に、思い切って話しかけてみた。正直なところ、考え込んでるほのかに話しかけるの、ちょっとコワいんだけどね。

「実はね よくわかんないの」

えへ、って顔で、舌出して っ、ちよつとちよつとあー!

「そ、それって、まずいんじゃない? 試しもしないで残してくっつてのは、いっくらなんでも」

「そつね、どこかで確かめられたらいいんだけどなあ」
いたずらっぽいやつで、にっこり笑って ああ、これだよあ。これがコワいんだ、ほのかは。

しっかりしてるように見えて、いっきなりとんでもないこと言い出すんだから!

「だから、どこかで、じゃなくて! え? うわわっ!!」

思わず、バンっ！ってテーブル叩　こうとしたわたしの右手が、テーブルにめり込んだ。な、なに、これ??

「うっ、や、さーむい寒い。はい、お待ちどうさま　って、ありゃあ、やつちゃったかあ」

真ん中のパラソルの柄を頼りに、めり込んだ手を引つ張りながら振り向いたら、赤地のバンドナが目飛び込んできた。タコカフェの店長さん。あかねさんだ。

「ごーめんごめん。ちよつと待ってて」

持ってたトレイを脇のイスの上において　あ、わたしのわきの下に手を入れてきた。そのままよしよ、つと引っぱり出して、

「ふう、これでよし」と

わたしがはまった穴に、テーブルと同じ色の板をはめ込んで、あかねさんが一息ついた。やれやれ、助かったわ。

「ユリコ　ちゃん、だったっけ？ごめんねえ。おわびにこれひと皿、サーブスするからさ」

「あ、ど、どうも」

目の前に出されたお皿とあかねさんを眺めながら、思わず頭下げちゃった。貫禄あるんだよねえ。さすが美墨さんと同じ、ラクロス部のOGだね。

「でも、あかねさん　？」

声が出るのに気がついて、わたしは手でぱつと口おさえた。そーつと目を上げたら、あかねさんがちよつと考えてからポンっ、と手を叩いて、

「あ、なんであたしが運んできたのか、ってことね。

ひかりが時々ぼーつとしちゃってねえ。そろそろ冬眠でもするんじゃないか、なんてからかってたんだけど　冗談じゃなかったらどうしようかねえ？」

思わず、ほのかと顔見合わせて笑っちゃった。ひかりちゃん心配だけど、この人がついてるんなら、まあ安心だよな。

ふう。安心したらお腹すいちゃった。さて、たこ焼

きたこ焼き、と　ん？　そういえば、

「あかねさん、この穴は」

「　　」　「コンロ、ですか？」

わたしが言いかけたことを、ほのかが引きとつた。そうそう。板でびったりフタしてあるし、壊れてるわけじゃないもんね。

あ。あかねさんが、にこっつ、て笑ってる。あいてる席に腰かけて、テーブルまんなかのフタをなでてるよ。

「去年までなら、寒くてもたこ焼き一筋！　だっただけだね。今年は模様替えしたことだし、あつたまるものも出そうかと思ってるぞ。」

とりあえず、このテーブルでコンロ使う許可は取ったんだけどね。」

そう言われると、なんだかテーブルの上に見えてくる気がするな。コンロの上で湯気立てて、いい匂いがふわぁと来るような。

「公園でおなべかぁ。面白そうですね」

湯気のまぼろしが消えた向こうで、ほのかが吹きだすの堪こたえてる。　わたし、そんなに食べたそうな顔してたかな？

「　　ま、これでひかりがノツてくれればねえ」

ぼそつ、って感じのあかねさんの言葉聞いて、わたしはほのかに目配せした。

「あかねさん。どんなおなべにするんですか？」

ふわつとした、包み込む感じのあったかい声。さっすがほのかが、よくわかっているよ。

ほあら、ちよつと沈んでたあかねさんの顔が、もう元に戻っちゃった

「ん〜？　そおだねえ　　まずはおしるこかなあ。お

雑煮は土地で違うから、はずしちゃうとアウトだしね。あとは、チョコフォンデュとか。なぎさに知られたら、食べ尽くされちゃうかもしれないけどさ」

軽口まで元通りだ。でも　あはは。やつぱり、美墨さんの存在って大きいなあ。ちよつと話題に出るだけで、みんな笑顔になっちゃうんだから。

あゝあ、もう。ほのかも、美墨さんがからむと思いつきり笑つんだもんなあ。こーいうとこ、かなわない。って、あれ？あかねさんが、なんかうなずいてる？

「ねえ。ふたりって、きょうヒマ？」

いきなりテーブルに体乗り出して、わたしたちを代わる代わる見てる。な、なんだかすっごい期待してる目で。

「え、ええ。特に用事はないですけど？」

なんとか答えたわたしに、あかねさんがにやつ、って感じで笑いかけてきた。

「だつたらさあ、パーティやってみない？」

「パーティ??」

ありやいや。ほのかとハモっちゃった。

「なべなんて初めてだし、ここのコンロをお客さんがうまく使えるかどうかも知りたいしね。」

ふたりとも化学部なんだから、火の扱いは慣れてんでしょ？」

あかねさんの言葉を聴きながら、わたしはほのかに目で訊いてみた。どうする？って。

でもほのか、パラソル見上げて考え事してる。しょうがない、わたしが決めるか。

なべでパーティなら、去年もやったような気がするな。ちっちゃなコンロでも、理科室のバーナーよりはましだし

「あかねさん。パーティ、うちでやりませんか？」

「こへ？」

こんどは、わたしとあかねさんがハモっちゃった。ぼんつ、て手が鳴る音がしたと思ったら、いきなりだもん。ほのかつてば、いつたいなにを

「このテーブルを全部、うちの庭に持ち込むの。それなら、あかねさんも、ひかりさんもお客様になれるでしょ？」

って、すっごい早口。あかねさんまで押されちゃって、びっくりした目でうなずくしかできないよ。

「じゃ、決まりですね。さあ、急いで準備しな

くつちや」

ほのかがぼつ、と立ち上がったと思つたら、そのまま小走りで公園出てつちやった。

「まあ、ほのかがいい、って言つなら、こつちは願つたりだけどさあ」

テーブルの上片付けながら、あかねさんがぼそつと何か言つたけど、わたしには聞こえてなかつた。

だって、わたしは見ちやつたから。

立ち上がるほんのちよつと前、にこつて笑つたほのかの顔。他の人にはただの笑顔でも、わたしにはわかる。あれ、絶対

「まくた、なんかたくらんてるわね。ほのか」

えつ？ っで顔で振り向いたあかねさんに、思いっきり作つた笑顔で応えてから、わたしは手早くたこ焼きをハンカチで包んでバッグに押し込んだ。

ちよつと頭下げて、さあ、走らなきや。手遅れになる前に !!

タコカフェのパンが、公園の奥の方に見えてきた。ふう、ようやくだよ。

「ねえねえねえ、なぎさあ」

志穂たちにおしおきしてから、黙つてふたりの前を歩いてただけど、

「もういいでしょ？ そんなムクれないでさあ」

そろつそろ、ふたりとも空気に耐えられなくなつたっぽいね。それじゃ、と。

「たこ焼き、おごり！」

くるつと振り向きながら、あたしは一言だけ言つた。くちびるとんがらせて。

ほあら、ふたりとも思いつきりうなずいてるよ。よしよし、とりあえずはオツケ。

「それじゃ、行こつか」

また前向いて、ちよつとスキップ気味に公園に歩いてみたりしてね。

ふたりとも、扱いやすいヤツ、なんて思ってたんだろうなあ。いいけどな。さっきみたいな空気に、もう

10分もいたら、あたしのほうが耐えられないもん。

ま、たこ焼きひとつもつけ、つてのもそりゃあるんだけどね。もう、ソースも倍で頼んじゃおっかけて、ん？

「あれ、あれ、あれねえ？」

志穂がびっくりした声出しながら、あたし追い越して走って。あたしも莉奈と顔あわせてから、あわてて追っかけてった。だって、あれってさあ

公園に近づくにつれて、見間違いないってわかってきた。パラソルたんでるひかりに、テーブル持ってパンに歩いてくあかね先輩。って、店じまい？。こんなに早く??

「あかね先輩ーいー！」

ダッシュで志穂追い抜いて、あかね先輩に手え振ったら、先輩がテーブル置いてこっちむいて、

「お、なぎさに、志穂に、莉奈かあ。ちょうどいいや、手伝ってよ。」

につ、ていう笑い顔見た瞬間、背中がちょっと寒くなった。ちゃんとコート着てるつてのに。

「みんな座ってる？。んじゃ、行くよあ。」

あかねさんの声のあと、かくんって、つんのめったみたいな感じがしてから、ゆっくり車が動き出した。

私の目がなんとなく、あかねさんの方にいつちゃうわ。テーブル全部片付けて、なんていきなり言われて、ちょっと疲れてるのもあるけど。運転してる背中なんて、あまり見ないものね。

「ん？。どしたの、ひかり？」

声かけられて、はっとした。私、なぎささんと並んで座ってたんだったわ。私はとっさに手を振ってごまかそうとしたけど。心配そうな顔。そうよね、

もう、1年近く一緒にいるんだもの。わかつちゃうんだわ。

気がついたら、また目が勝手に運転席の方をむいてる。あかねさんの隣——助手席には、なぎささんのお友達の志穂さん。いつも私がいるところに、志穂さん

「ああ、アレね」

別の方から声がして、ぱつと振り向いたところに、やれやれ、って感じの顔があつた。

「ごめんねえ、九条さん。志穂って先頭に座るの好きだからさ。今日だけ、ね？」

確か莉奈さん。やつぱり、なぎささんのお友達。

私が何も言えないでうなずいてたら、背中がぼん、って叩かれた。

「まあまあ。帰りはあたしが引きずりおろしてやるからさ。勘弁してよ、ひかり」

「くらくらくらあ！聞こえてるよお、なぎさ！」

あ、志穂さんの声。助手席のまくらにしがみつい

て、こつち見てる。

「ここはひかりちゃんの指定席だもんね。とつたりしたら、大先輩になにされるか　うわあ！待って待って待って、あかね先輩っ!! 冗談、冗談ですってばっつ!!」

前の席で、なにやってるんだらう?　なんだかものすごく焦ってる志穂さんの声の中、くすくす笑ってるなぎささんたちの目が、私とあかねさんをちらちら見てる気がするけど。

「それよりそれより!　みんなで話聞こつよ。置きクロスのこと!」

って、なによなによなによ?　ぼかーんとしちゃってえ。みんな使ったことあるでしょ?　があかね先輩の置きクロス」

置き　?

「志いゝ穂。たこ焼きのおごり、もつひと皿追加したいの?」

なに言ってるのかわからなくて、私はなぎささん

と志穂さんをただ交互に見てた。なんだかふたりの間に、ボールが飛び交ってるみたい。

どうしよう、って考えてると、からだの車の前の方に傾いた。あ、赤信号なんだ。

「こらこら、ふたりとも。ひかりが置いてきぼりくらってるじゃないか。それにしても、まだあるんだねえ。あたしが卒業したとき残ってたクロスつてさ」

あかねさんが、ちらつとだけ振り向いた。ふしぎだな。顔を見ただけなのに、ほっとするわ。

そっか、置きクロスつて、学校に残していくクロスのことだったのね。なぎささん、もう卒業だから、それでなんだ。

「もう、ラクロス部名物ですよ。なんたって、正しく振らないとクロスに振り回されちゃうんですからね。『びみよ』な折れかけクロスだから」

「『びみよ』なクロスで悪かったねえ、りくなちゃあん？」

正面に座ってる莉奈さんの顔が、ぱつ、と固まっちゃったわ。

いきなり、車の中だけ温度が下がった気がする。なんかへんな雰囲気。なんとか、しなくちゃ。

ぶおん！

いきなり大きくなったエンジンの音で、みんながぎゅつ、とからだを縮めた。けど、動いてない？

「あはは。ごめんごめん、冗談だよ。」

あたしの置きクロスつて、卒業して2ヶ月で折られちゃったんだから。『びみよ』なのは当たり前さ。運転席を見ながら、私はどんな顔したらいいのか分からなかった。なぎささんたちも、同じみたい。

ただどあかねさんの顔が、にこにこ笑ってる。私たちひとりひとりの顔、確かめてみたいに見ながら。「あのクロスはね、卒業しても後輩を信じてる、って証拠に置いてったんだよ。折られたっていいじゃないか。あたしが信じてるのは、変わんないんだから。」

それがまだ残ってるってんだから　あたしは、間違っ
てなかつたんだよ」

あかねさんの顔が前を向いたら、すぐかくん、つ
てつんのめった感じがして、また車が動き出した。

「信じてやんなよ。なぎさ」

静かな車内に言葉が響いたのといっしょに、隣で
うなずいてる気配がした。とつても気持ちいい、あつ
たかい気配が。

助手席より、この席の方がいいかも。なぎさ
さんたちが、いるときは。

車がほのかん家の前に停まったとき、なぐんかい
やな予感がしてたんだよ。実はね。

「いらつしゃい、みんな。あ、なぎさたちも来てく
れたのね♡」

車を降りたら、目の前にほのか。思いつきりの笑
顔が、なぐんかあやしい。スキー行ってから、なん
となくほのかの考えが以前より読みやすくなった
気がするんだよね。

考えことがあるときに、へんなの増やして欲しく
ないんだけどなあ　痛たたっ！

「こらこらこらあ！　なぐにやってんの、なぎさ。さっ
さとテーブル持ってくー！」

車の中から、莉奈たちが荷物持ちながらジロっ、と
こつち見てる。ああ、出口ふさいじやってたんだっけ。

にしても、志穂おっ、テーブルで小突かなく
たつていいじゃないのよあー！

「ほらほら、早くしようよ。日が暮れたら、パーティ
できないからね」

あれ？　ほのかの後ろから出てきたのって　化
学部の、ユリコだ。なんだ、ほのかだけじゃないの
か。ふう。

よあし。テーブルに、パラソル持って、とつと

ほのかン家の庭に運んじやおつか。もう、イヤな感じはなくなってるし。

なんたって、ユリコがいるんだもんね。あの子がいれば、ほのかだってそうそう暴走しないはず。さっきの感じは、気のせいだったんだよ。きっと。

なんて。ちよつとも思ったのが、間違いのもどだったんだ。はあ

「おまちどうさま、なぎさ」

テーブル運んで、カセットコンロ置いて、ちよつと休憩してたあたしたちの前に、白いのがやってきた。おぼんにひとり用のナベのせた、ひかりたち。タコカフェの白いコート着て あれ？

「ほのか。なんでほのかだけ白衣着てんの？」

「これ？ ふふふ。なんとなく、タコカフェのコー

トみたいでしょ？」

いや、どつちかって言ううと実験室の雰囲気なんだけど ああ、よく見たら、ユリコも白衣姿だ。みんな気にしてないみたいだし、まあ、いいが。

みつつのテーブルに、ふたつづつ。ふたの色がみんな違うナベ。ほのかン家はなんでもあるね、ほんと。ひかりから、ぬれタオルで熱いナベ受け取って、コンロにちよつとだけ火をつけて、と 最初っからここで煮ないと、ちよつと雰囲気でないけど、しかないか。本番じゃ、渡してあとよろしく、ってわけにいかないもんね。

まわり見たしたら、全部のナベがくつくつ言いだしてきてた。あかね先輩もうんうん頷うなずいてるし、よしよし。

「みんな、ジュース渡ったかい？ それじゃ、タ

コカフェの新メニューに、かんぱーい！」

あかね先輩の掛け声と一緒に、かんぱーい、といった

だきまゝす、が混じる中、ナベのふた取つたら

おおっ！

「はい、おしるこですよ」

同じテーブルに入ったひかりが、にこにこしながらあたし見てる。味付け、手伝ってきたんだね、こりゃ。

「ほんと、甘いくていい匂いだよ。ありがとね♡ それじゃ、いただき」

って、小さなおたまをナベに入れたところで、あたしはなんとなくヘンだな、って思った。

みつつのテーブルにふたつづつのナベ。あわせてむつつ、だよ。ここにいるのは

くるっ、と振り向いたところに、ほのかが立っていた。白衣姿でボード持って、みんなを見まわしながら、何か書いている。

待ってよ、ちよつとあ。いくらほのかでも、まさか、ねえ？

そうだ、ユリコはどうよ。あの子がいるんだから

って、あつちやあ。

莉奈たちのとなりのテーブルで、やっぱりボードに何か書いているよあ。火の具合とかメモってるふりしてるけど、あたしにはわかる。食べない気だ、あれ。

って、ことは ヤバいっつっ!!

「ひかり！ それ食べちゃダメっ!!」

「え？」

おたまごと、がばつとフタした向こう側で、ひかりが目を白黒してる。かわいそうけど、今はちよつと構ってらんないな。ほのか、いったいなに入れて

あ、そゝおだ

「ひかり。悪いけど、火とめてジューズだけ飲んでてよ。あたし、ちよつと行ってくるから」

手元のお椀におしるこぽつ、と入れて、あたしはそあつと歩いていった。

見てなよ、ほのか。簡単にやられないんだから！

ユリコのテーブルには、あかねさんとユリコ。うまく勤めてるみたいね。あかねさん、ぱくぱく食べるわ

となりのテーブルは、莉奈ちゃんと志穂ちゃん、かおしゃべりばかりで、なかなか食べてくれないわ。うん、これは、あとで行かないとダメかしら？

で、最後のテーブルは、と あら？ なぎさがない？

「ほのか」

わたしがメモとっていたノートパッドの影から、ぱつと顔が現れた。

「な、なぎさ。食べないの？」

「いや、ちよつとね。ほのかに、相談っていつか、その」

あら？

手を後ろに回して、もしもししてるわ 本当に、

困ってるみたい。なんだろう、なぎさがこんなになるなんて。

「なに遠慮してるのよ。わたしにできることだったら、なんでも聞かせて」

ちろつ、と上目遣いしてるなぎさなんて。こんなの、はじめてだわ。いつたい、なに？

「卒業の記念に、クロスを置いていけて言うんだよ。志穂も、莉奈も、あかね先輩もさ。だけど残してって、いいのかなあ、って思ってた。」

莉奈たちは、きつとみんな欲しがるから、って言うんだけどね。それが、あたしがキャプテンのときに優勝したから、っていうのなら、なんか 違う ような気がして」

ふうん そっか。なぎさも、おんなじなんだわ。

じいっと、まばたきもしない目を見つめてたら、思わず口元が緩んじやった。笑っちゃいけない、って思っただけど。でも そっか。

「ねえ、なぎさ。自分がいたこと、って、学校に残

しておきたくない？

わたしは、残したいわ。みんな、忘れちゃうかも
しれないけど。壊れて、なくなっちゃうかもしれない
いけど。自己満足かもしれないけど。でも、わたし
のおくすり、残しておきたいな。」

「ちょっと目をつむって、そのままわたしは顔を上
げた。その向こうに、理科室が見えるわ。みんな気
にとめないけど、すみっこの方にひとつだけ残って
る、小さなビンがあつて　むぐぐっ!？」

「で、残してくくすりの実験してた、ってわけ？」
い、いきなり口の中に、なにかが入ってきた!？口
いっぱい、あずきの味が広がって　まさか！

「言つとくけど、さっきの話はホントだよ。ほのか
に相談して、気持ちもよくわかつてすっきりした。
サンキュ。」

だ・け・ど。それとこれとは別だかんね」

いけない、って思ったときには、もう、目の前が
ぼおっとして

目の前でかくん、って崩れそうになったほのかの
身体を抱き上げて、あたしはひかりのテーブルに向
かった。

「スプーン大盛りでこれかあ　どうするつもりよ、
ほのかあ」

イスに座らせたけど、手はだらーん、ってなつたま
ま。となりでひかりが、心配そうに覗き込んでるよ。

あたしに使うくらいだから、いのちに関わるよう
なくすりじゃないんだらうけど　ホントに、大丈
夫かな？

「さっすが美墨さん。バレルの、早かったね」

目を上げたら、そこに白衣のユリコがいた。やれ
やれ、って感じの顔で見つめてる

あたしは立ち上がって、まっすぐユリコと視線を
合わせた。でも、しばらく言葉が出ないよ。ほのか
のイタズラ、あんたが止めないなんてっ！

でも、ユリコがいきなり、にやっ、て笑った。なに？

「怪しかったでしょ？ ほのかだけひとりですべから離れてたし、わたしもエプロンでいいのに白衣着てるしね。ほのかをいつも見てる美墨さんなら、きつと気づいてくれると思ってたんだ」

へ？ じゃ、これ、最初っから？

「ほらほらほらあー！ やっっぱ、あたしの言った通りじゃない。ユリコちゃんが怪しいときは、なんかあるんだって」

いつもの声で振り向いたら、志穂と莉奈がそばまで来た。一番向こうのテーブルじゃ、あかねさんが突っ伏してるけど。

「ね？ 被害は最小限にできたでしょ。やっぱこういうのは、自分が実験台になるべきだからね。あかねさんには悪かったけど ひゃうわっ!!」

その瞬間、あたしは開けた口がふさがらなくなっちゃった。

だって、目の前で、その

「ご、ごめんっ！」

「なに言ってるのよ！ 美墨さん、助けてえ！」

つたつてえ。これってどう見ても、

「うふふふふふ」

ちよつとだけ笑い声出してから、またユリコの首すじ、ほのかが吸ってる。なんて、言っか、えつと、

「ほのか、ユリコ襲ってるの?」

なんかこらえてる感じのユリコと、嬉しそうなほのかの顔見て、あたしたちはぼかーんとしちゃってた。

動かなきゃいけないんだけど、どうしたらいいか

「ほのかさん、しっかり！ うひゅあー!!」

ああ、今度はひかりに襲い掛かって ほつべたに吸い付いちゃった。

「な、な、なんなんですかあ、これえ!!」

あはは。ひかり相手だと、なんだかかわいいなつて、ちよつと!!

「だくめつっ!!」

すっごい大声といつしょに、ほのかが吹っ飛ばされた。あたしがなんとか受け止めて、イス座らせたけど、いまのつて　いいっ!!

「つつかまつえたっつ」

「きゃっ!! あ、あかねさん??」

いつのまにか、あかね先輩がひかりに背中から抱きついでるよ。ほのかみたいに吸い付いたりしないけど、髪の毛とかほおずりしたりして

「これは、あたしの〜っ♡」

「え? あ、あの　ええっ!!」

真っ赤になってるひかり見て、あゝあ、って、莉奈たちがため息ついてる。そんな場合じゃないでしょうが!

「先輩、あかね先輩、本音出しすぎっ!!」

「ほん、ね?」

お願いだから、こつち見ないでよあ。どんな顔すりゃいいのよ、まつたく。

「あーっ!! もつ、いいって! ひかり、あんたは気

にしないでいいからっ!!」

もつ、ほのかつてば、なんてたちの悪いくすり使うのよあ　ひっ!

背中に、寒気が走った。なんか来る。なんかなんて、決まってんじゃないの!

「こつち来るなあっ! わぶっ!!」

振り返ろうとしたときには、もう手遅れ。横からおなかに抱きつかれたあとだったよ。もちろん、ほのかに。

ああ、そのままほつべたに吸い付いてきた。さっきのひかりみたい。あたしじゃ、あんまりかわいくないけどさ。

「おゝい。とりあえず、抵抗しないほうが早く解放されるみたいよあ。

抵抗すると、とことん襲い掛かってくるわ」

ユリコの、疲れた声がのんびり聞こえてきた。まつたく、もあゝっ、自分は解放されたからって無責任にいっ!

だいたい抵抗するな、たつて　んぐ。ま、まあ、ほつぺたくらいならいつか。

「はいはい。ほら、じゃそのあたりだけね。さつさと済ませなさいよ　つてちよつと！　どうしてあんたは、正面に回ってくんよ？」

抱きついた腕を、よいしょ、よいしょ、つて。なにやつてんのよあ、ほのかあ！

「やっぱり　なぎささんだからじゃ　？」

ひかりの声の方見てみたら、まだあかねさんにほおずりされてるよ。でも、ひかりもあかねさんの髪をなでてあげてる。なんか、平和だなあ。

うわつ、また正面に近づいてきた！　こつちは平和どこじゃないよ！！

「うれしい？　やっぱ、うれしい??」

志穂がキラキラした目でこつち見てる。莉奈もユリコも止める気まるつきりないし、もあぐつ！

「うれしいわけあるかあぐつ！

ちよつと、ほのか！　離れなさいつ、つて!!」

あぐつ、全然離れてくれないよ。いつもはそんな力ないのに。これも、くすりのせいなのかなあ　うわ、来たつ！

「もあ！　口元なんか、なめるんじゃないつてば！　ぶぶ？」

思いつきり叫んだとたん、中があつたかくなつた。つていうか、

「ぶぶ、ぶぶぶ　ぶはっ！

こらぐつ、ほのかつ！　口の中までなめまわすんじゃないつて!!」

どこまでやる気よ、まったく。もうおなかじゃなくつて、わきの下あたりに抱きついて、胸に顔びたつとくつつけてるし！

「えつとえつと、えぐつと　」

ん？　なんだろ、ほのかが落ち着いたと思ったら、なんだかまわりが変な雰囲気だよ。ひかりなんか、無理に目えそらしてる？

あれれ、ユリコが近づいてきた。あたしの耳元に

口寄せて、

「いまのってさ、ふつう『ディーブクス』って言わない？」

「でー？ なっ　　!？」

「ばっ、とほのかの両肩つかんで思いつき引き剥がそうとしたら、一瞬見えたよ。すっごく幸せそうに笑ってる、ほのかの顔が。」

「ころっ！ ぜったいわかってやってるなっ、ほのかっ!!」

その瞬間、胸のあたりが楽になった。

「ふふふ。おかえしっ♡」

「そう言いながら、そのまま家に飛び込んでくほのかのあとに、忠太郎がこっち向いて座ってる。まるで、来るな、って言うてるみたいに。」

「っはぶう。ほのはっへは　　ふへ？」

「ロンなかに、なんかある。指でさわってみたら、うすっぺらい何か　　よっ、と。」

出てきたのって、一枚の紙。さっきなめたとき、いつ

しよに入れたんだな。ええと

『なぎさのクロスに、わたしのくすりつけて、いっしょに残していこ。不注意で割ったら呪われるぞ、とか書いて　　』

「読んですぐ、あたしは紙をポケットにしまった。

「いっしょに残す。いっしょに残ろうっ、か　　」

「そうだね。それがいいかもしれない。あたしとほのか、ここにいた、って証拠だから。わがままでけど、そうしたいから。」

「わかったよ、ほのか。わかったけど、けど、さあ」

「ひかりは、半分眠ったあかね先輩支えながら、そっぽ向いてるし。」

「志穂たちは、ちらちらこっち見ながら、くすくす笑いしてるし。」

「ユリコも、やつぱりこっち見ながら、ボードになにかメモしてるし。」

ったく、ったく、ったく、ったくっ！この妙な雰囲気、
どうしてくれるの。ほのかっ！！

—おしまい—